

伊平屋島「海の学校」視察

八重山支庁農林水産振興課

1. 目的

近年、沖縄県近海域の水産資源は減少の一途をたどり、魚価の低迷と相まって漁家経営は厳しい現状にある。資源の増加や経営の安定のために最近では栽培・養殖漁業や資源管理型漁業への取り組みが推進されている。また、釣り案内等の遊魚や体験漁業といったサービス業も取られるようになってきている。八重山漁協でもこれまで行われてきたパヤオやグルクン釣り等の遊魚に加え、最近から体験漁業に取り組んでいる漁業者もいる。今回は県内での観光漁業の成功例である伊平屋島の漁協・漁業者と意見交換を行うことにより八重山での観光漁業（体験漁業）の方針を考えていくことを目的とする。

2. 交流先

伊平屋村漁協「海の学校」関係者

漁協内事務局 藤田惇志

海の学校研究員 西藤優三

副組合長 新垣雅士

遊魚部会会長 屋富祖正和

遊魚部会副会長 諸見富男

3. 日時

平成13年3月23日～24日

4. 参加者

八重山漁協青壮年部 名嘉正直

八重山支庁農林水産振興課 山田真之

5. 交流内容

◆伊平屋村漁協の概略

伊平屋村漁協は正組合員・准組合員あわせて100名程度の沖縄最北の離島にある漁協である。

組合員のうち34名はもずく養殖にたずさわっており、他にはイセエビ漁や電灯潜り漁が盛んに行われている。

組合は常勤職員8名で運営しており、伊平屋の特産品であるもずくを使用したもずくそばやもずくゼリー、塩漬けもずく等もずくの加工品製造・販売も行っている。また、海の学校事務局として漁協内に担当職員（藤田氏）をおいている。

◆「海の学校」について

海の学校は基本的には4泊5日のツアーで構成している。基本メニューは今井氏が決め、事前に東京で客（生徒）にブリーフィングを行っている。メニューとしては追い込み網、イシミーパイ釣り、イセエビ漁、サザエ取り、もずく網揚げ体験等があり、季節や客の体力・能力によって決定する。海の学校ではグルクン釣り等いわゆる遊魚はあまり望まれていない。開校時期は基本的には年中開校するが、主に夏場に多く開校している。客はメニューについては一度東京で行っているブリーフィングや日程表などで確認しているので、現地ではあまり文句は出ない。天候などにより予定のメニューが実施できないときはあらかじめ、別メニューを行っている。

先生となる漁業者は漁協の遊魚部会（会員14名）に属しており、主に会長と副会長が対応し、先生役の割り当てを決める。開校時から先生役をこなしている漁業者はダイビングのインストラクター資格を持っているが、その後先生になった漁業者はインストラクター資格は取っていない。先生役の漁業者数は客数によって決まるが、修学旅行など大人数の場合は漁協や

遊魚部会員以外の漁業者も総出で対応している。

海の学校の設立には東京の今井氏と伊平屋村漁協の西銘組合長が協力しあうことにより可能となった。現在でも今井氏と漁協の共同経営という形で運営している。集客等の窓口と東京でのブリーフィングを今井氏が担当し、開校時期や参加人数が漁協の窓口と連絡され、漁協の遊魚部会で担当する先生を決めて、実際に客を伊平屋島に受け入れ、体験漁業を行う。海の学校の開校は1996年であり、当初はダイビングを中心に営業していたが、98年頃から体験漁業に取り組みはじめ、ダイビングは減少していった。海の学校参加人数は1999年までは100名弱であったが、2000年は修学旅行の受け入れも行い、300名弱の参加があった。またJICAの研修生の受け入れも年一回程度行っており、サザエ取り等漁業の実体験をさせている。海の学校の校舎として漁協のダイビングサービスの建物があるが、これは体験漁業とダイビングサービスを複合的に行うために作った。

現在は夏場の電灯潜り（イセエビ獲り等）の時期に多く海の学校を開校している。漁業者としては海の学校の先生をする場合と漁をする場合、金額的には漁をした方が収入は多い。ただし資源が減少して行くであろう未来のことを考えると皆で電灯潜りを行うのではなく、複合的（漁船漁業、養殖漁業、観光漁業）に漁業に取り組んだ方がよいので、将来を見据えて海の学校への取り組みを行っている。また、海の学校を開校することにより、島外の人たちとの交流する場が生まれる。また、海の学校は客にとっては既存のバック旅行と違いかなりの金額（東京発の4泊5日で約16万円）を支払っての体験漁業になるが、地元にとってはフェリーや民宿の使用等地元産業への波及効果も期待できる。

◆海の学校の問題点と課題

漁協内でも海の学校に参加せず漁業だけを行っている漁業者の方が収入は多いであろう。し

かし、全漁業者で統一して取り組むためには現在の海の学校の規模では小さすぎるし、規模を大きくするにしても現在のシステムでは限界に近い。特に宿泊先は大きな問題で、島内には民宿が数件しかなく、1軒1軒の規模も非常に小さい。平成12年に修学旅行客を受け入れたが、一度に100名も受け入れると統一したサービスを提供できない。また、規模を大きくしすぎると、体験漁業ではなくなってしまう恐れがある。現在は漁業者が先生という形で体験漁業を行っているが、これが専門化してくると商業化して海の学校らしさがなくなってしまう恐れがある。

夏場はもう少し海の学校を開校する余裕があるが、東京で集客を担当している今井氏が海の学校の窓口以外にもいろいろ忙しく連絡が付きづらい時がある。しかし、漁協は常に職員がいるので連絡窓口を漁協にして、今井氏の方では宣伝活動、メニューの作成と東京でのブリーフィングを行ってもらえばより確実な集客・運営が期待できると思われる。

現在は海の学校といううわさ話だけが一人歩きしているような現状にある。伊平屋村自体はどこにあるのかも知らないが海の学校であれば知っているなどである。また最近では客よりも視察の方が多くなってきている。

◆海の学校の今後の展望

近年の学校教育では体験学習の要素が取り入れられるようになっているので、体験漁業ということでは今後発展していく可能性はある。平成12年に私立の小学校と高校、公立の高校の修学旅行を受け入れたが、公立校は安全性を重視するため、規制が強く体験漁業に來たのに生徒を海に入れることができないのが実状であった。その点私立では自由度が高く、生徒の体力に応じて海での作業を体験させることが出来た。

他地域（本島地区や宮古・八重山など）が体験漁業に取り組むことに関しては、それぞれの島に特徴や漁業形態があるので反対はしない。

むしろ積極的にそれぞれの活動や客の要望（ニーズ）を連絡しあうシステムを作ることにより、客の細かい要望に応えることが出来るようになり、バック旅行に取り込まれずに共存していけると思う。バック旅行等に組み込まれてしまうと客数は増えるかも知れないが値段がもたなくなり、利益が無くなる。最終的には周囲を巻き込んで自滅する。

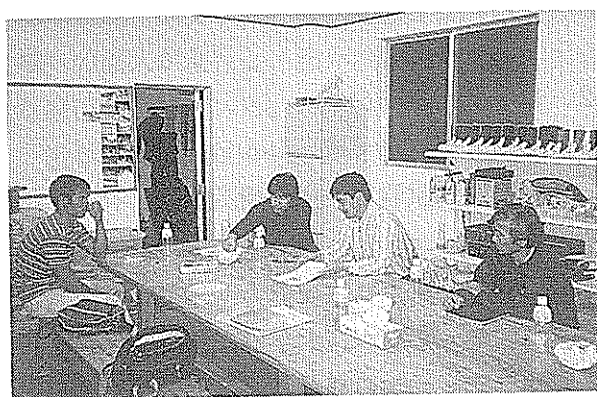
6. 感想

伊平屋村の海の学校というものは県内での体験漁業の成功例といわれ、東京の集客と地元の受け入れの体制が整備（役割分担）がきちりとされているものと思ったが、取り組み自体がまだ数年と浅いせいかな問題点もいくつか抱えている。また、北部の離島という交通の便からいえば八重山より不便な状況にあり、観光地化もされていないため宿泊等大きな問題を抱えている。一方ではそののんびりした離島の雰囲気伊平屋島の海の学校の取り組みにおける長所にもなっている。

現在のところ石垣島ではサバニクルーズとい

う数時間で完結する観光漁業に取り組んでいる漁業者がいるが、石垣のように島自体が商業的に発展し、多目的（西表島観光や竹富島観光等）で来島する観光客が多い場合は、伊平屋村の海の学校のように滞在型体験漁業より短時間で完結するものの方が初期の取り組みとしては適していると考えられる。また一方では県内最大の八重山漁協があり、漁業種類とそれに係わる漁業者数は非常に多く統一さえ出来れば八重山で全ての漁法を体験できるという体験漁業のメニュー的にも困らず、また、宿泊先等もホテルから民宿まで幅広く多くの人数を受け入れる許容力があるので長期滞在型にしてもハード面では問題点はない。ただし、伊平屋島のように漁業者をとりまとめることが難しい上に、東京などの大都市で集客等ができる人間または方法を見つけないければ成功はしないであろう。

現在の八重山の観光漁業は遊魚の域を脱していないものなので、今後の取り組みとして漁協・漁業者のみならず観光業界とも連携を取りながら漁家経営の安定の為に取り組んでいく必要がある。



交流風景



「海の学校」校舎